近年、翻訳概念への省察を契機とした議論が盛 んであり、翻訳論、翻訳研究における議論も著 しい展開を見せている。翻訳実践の隆盛は言語文 化間の交流が活発となった証である。他方、翻訳 の盛んな言語文化は、優位な文化の摂取受容の言 語的な作業が恒常化していることを示し、国際関 係におけるその劣位と植民地的な状況を現してい る可能性もある。実際、歴史的現象としての翻訳 実践の多くは、二言語間の不均衡な関係の現われ である。またある時代に、翻訳の需要が急増する ことは、何か切迫した状況(欧州連合など)を物 語っている。このことは、翻訳論を説く思想家の 多くが言語的デアスポラ的状況を生きていたこと とも無関係ではないだろう。

作为历史性的现象的翻译实践是很多的，体现了两种语言之间的不均衡的关系。

不可避の他者「漢字」の受容と批判

1. 作为翻译实践的汉文训读

通常科学としての翻訳学の研究者が、「日本」 における翻訳の歴史を辿ろうとするとやや特異な 事実に直面する。まず、大和民族は、漢字伝来以 前に文字をもたなかったが、漢字が伝えられるこ とで、通常の意味で中国語を学んだわけではなか った。ローマ帝国の周辺国が帝国の言語としての ラテン語を学んでいったのとは対照的である。次 に、大和民族は、漢字を「外国の文字」とみなす ことなく取り込み(訓読みの発明)、さらに仮名 文字を発明していった。これは他の非漢民族が、 漢字を異民族の文字と見なし、一字一音を原則と し、音読みのみを採用したのとは対照的である。 最後に、中国大陸から膨大な漢文古典、漢訳仏典 がもたらされたが、それらの通常の意味での翻訳 ではなく、**漢文訓読という極めて特異な訳読法が 考案され【是一个非常特别的译读法】**、千年以上にわたり受け継がれていった ことである。このことも 、通常の翻訳(ラテン語 からバナキュラーへ)において文法と修辞学とい う二つのディシプリンが必要とされた 8 のとは対 照的である。漢文訓読の発達は日本語の書き言葉 の創造のプロセスそのものであり、仮名文字に加えて、和文に漢字を加えた文体としての和漢混淆文、現代の漢字仮名交じり文にいたるまで、日本語の書き言葉、そして話し言葉成立の基盤となっていった。この特徴からは、日本語は古代漢語と大和言葉とのクレオール語として発達したとみることもできる。

在通常的翻译中，必须要有文法和修辞学这两种discipline。汉文训读的发达是日本语的书写语言的创造的过程，加上假名文字，和文与汉字混合而成的文体和漢混淆构文；现代的汉字假名混在一起的文字，构成了日本语的书写文字，然后成为了日本口语的成立的基础。从这个特征看，日本语是古代汉语和大和语言的克里奥尔化的结果。

日本の漢文訓読の歴史については、国語史や音 韻史などで、既に膨大な研究の蓄積があるが、訓 読を思想史の課題として読み解く中村春作は、訓 読法の中身と変遷を検証していくと、それが単に 技法のレベルに止まるものではなく、すぐれて思 想史の問題であり、そこには日本における異文化 理解のありようが端的に表れていると指摘してい る1

平安・鎌倉時代の漢籍 は、約200点が現存しているという13。加点資料 が現われる以前の時代、漢文直読(音読)と訓読 が併用されるような時代では、訓点を記すことな く漢文が読まれ、その場合、訓読の方法は師匠か ら弟子へ口伝され、暗唱されたと想像される。訓 点の位置、読み方は、学者の流派や家によって異 なり、江戸時代初期にいたるまで秘伝であった。 つまり、漢文訓読法が博士家や流派の内部で秘匿 すべきものとされている間は、そこに標準化は起 こらず各流派の中で創意工夫されるに留まった。

在现在的加点资料的以前的时代，音读和训读并用的时代（为什么音读不再是流行了？）力，在阅读没有训点标记的汉文时，通过师傅向弟子口传，然后通过记忆来获得的。训点的位置、阅读方法，根据学者的流派和家传的不同，一直到江户时代初期都是秘传。也就是说，汉文训读法是博士家和流派内部的秘密，在没有标准化的前提下，保留了各个流派解读汉文的创意和工夫。

漢文訓読は一つのリテラシーであるが、それが特 定階層の言語資本として限定されると、訓読がも つ意味(それが翻訳実践であること)についての 批判的省察は生じにくいものと推察される。これ は、日本で翻訳論らしきものが18世紀にいたるま で現われなかったことに示されている。

2，对汉文训读的省察

子安宣邦は、漢字漢文という中国語エクリチュールは日本にとって圧倒的に優越する文化的所与であり、漢文訓読とは「優越する書記言語(漢文)を前提に、そこから意味の転移によって新た  
な書記言語(和文)を構成していく作業」だと捉える。しかし、ここで「訓読者には己の訓読作業が優越する他言語**テクスト【テキスト】**から受容的に新たな自言語テクストを作り出すことであるとは意識されない。訓読者はみずからする訓読をただ漢文を和文風に読むこととしてのみ意識」14している。つまり、漢文訓読は、漢文脈に対応する和文脈があたかも平衡的に存在するという錯覚を抱きながら、 は、林羅山の僧名道春に由来し、林羅山が訓点を他言語(漢文)に受容的に対応しながら固有の自 言語(和文)を見出していくという言語行為なの である。 子安はこれを「漢文訓読のイデオロギ ー」と呼んでいる。漢字漢文は、訓読者にとって その異質性が限りなくゼロに近い不可避の他者と してあったというわけである。このイデオロギー に相対的に無自覚である間は、翻訳に対するメタ 的な省察は現われにくいと考えられる。